三勝半七

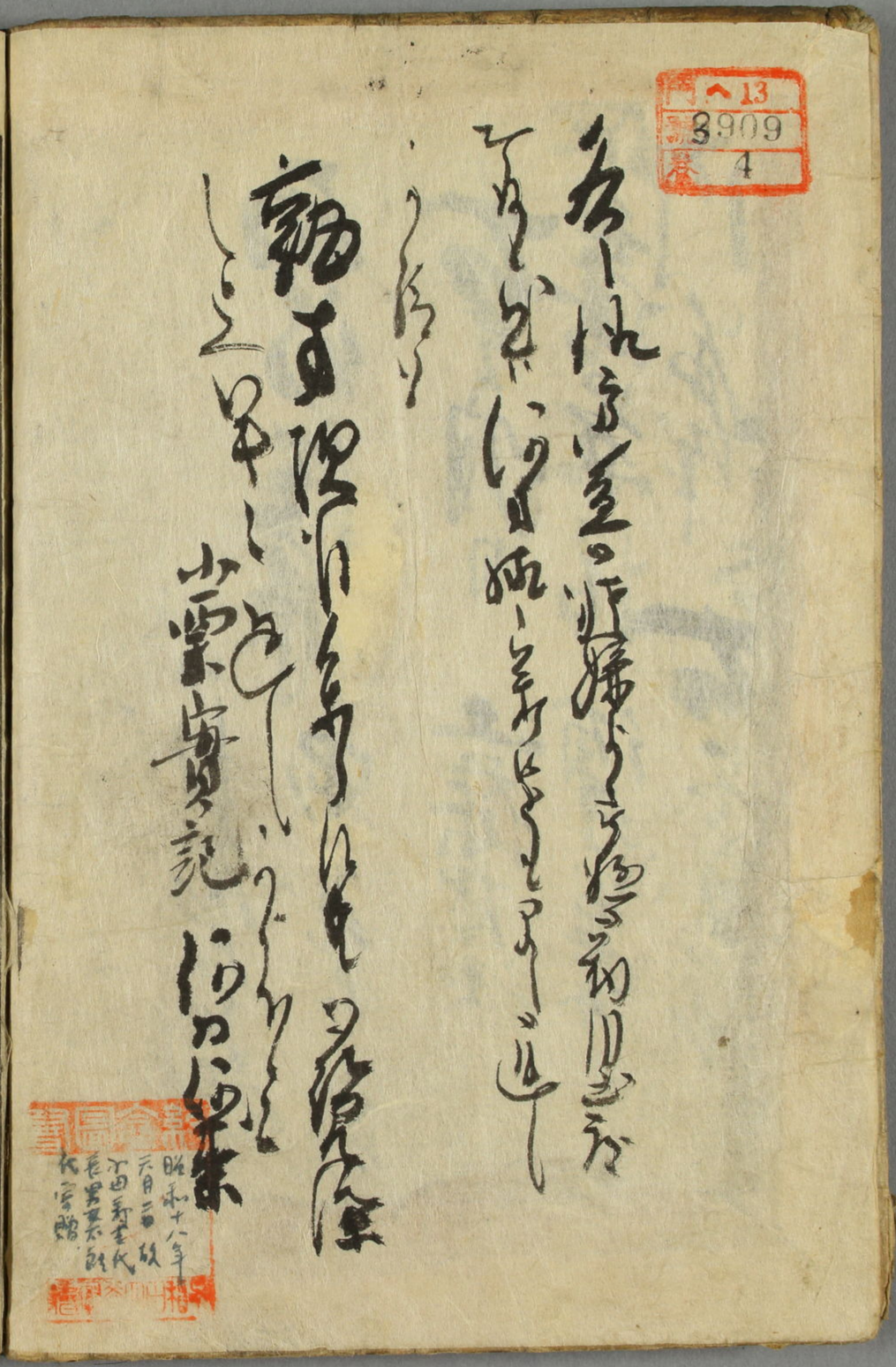
南柯夢

前篇

四

へ13
3909
4

へ13
3909
巻 4



東西村六物

三七全傳南柯夢卷之四

東都 曲亭馬琴編次

真葛が朝風

今市全八郎。布施蝶九郎ハ。その夜さう三勝を親たち奪去。中三條河原までおくるゝ。笠松平三ヨ撞見相語る悪棍脚平足平ハ。これが爲ふ打殺さん。剩三勝ハ。赤根半七が引攫て。往方もそうどまりしく。犬の追立一鶏を。鷹ヨ捉られてる心持して。平三をうち捨て。これを追蒐。涯ヨ塗れて。索めぐりしが。終ヨめんどう真葛が原のほうふ。夜ハ明ゝ。甲夜の閑雑より引ぐるをもとゝ休らい。疲労ゝ。脚うち伸し。五ヨ面をヨあつて。呆ゝ立在打しもあり。捕ハ。の鞍ヨ。くゝと走り。直とう圍矢庭ヨ捕んとく。闘くゝ。全八

蝶九郎は大に驚たる。何ぞ狼藉とのゝしるもの〳〵。野袴の裾結揚
両刀を斜ふ志てる壮佞。徐ろに立ち出でを見咎人ぞ。厳の仰ぎ
ぬ。けゞれ布施今市は慌眼を定めて其人を見ばこれ別人
ふめらぶ。典膳が児子蛾松曽太郎なり。縁故さへ推量られ猛を光視
れど。胸うちさわぎ。そうの返答及ばぬ呆まそぞ立ちゐる。あとた
曽太郎は。全く蝶九郎を偽とあらぬ。覬覦の盗臣。吉雄九郎。遥酒
をもてめ進ぶ。賀の用金を私し。剰舞く三猪を奪ひ去りて。三猪河原を
開し。管領家の走卒を猛しる。既発覚ば。逃るも何地をぞ。暫
ぶ。そ。縛をうけ。ふとくいたきなく罵ば。件の両人。冷笑ひ。吾倚
嘗郎君と遥酒をもてめ。用金を私するなり。況く三猪とやらんを
奪ひ去。管領の走卒を猛しるんどとは。ぞひ慢て。

後悔なせそとのゝしるもの。曽太郎呵ゝとうち笑ひ。盗人悍くして。
いかゝ〳〵めるる。さのふ芝松平三と申らんが門方。管領家の文章を殺。
その衣服を剥ぎて。三猪を拐ひ出せり。證据分明なり。既陀平さく
来ぬと呼ばゝ。まうと為ぬ。小松の蔭ぬ。年の齢四十ばかりなる男赤
裸ぬ。さく来つ。ひふ金八嫁九郎と申ぶんぞ。れを怒ばりやと問ば。二人は驚と
ぬ。汝は昨の芝卒なる狡。蘇生して。かゝるべきと。逃んとせ乳ば。戰兵ども
立塞ぎ。逃生る道もなし。忌〻と呟ば。曽太郎ぬ。近曽吉雄九郎の
行所。ぬ。ぬ。ぬ。南都ぬ。大厨のかん憤り。ぬ。厚倉一郎
太夫ぬ仰ぬ。れ旅館の馬体を窺ぬ。世の風俗を違ぬ。汝
等が。君を貶ぬ。私慾を耽る。既ぬ。二郎太夫。同
者をもぬ。毎日ぬ汝が出居ぬ意を。既陀平ぬ猛叱

されることを。同者ゆえとうて殺さ。その母とうふ遺なる扇を見るふ隙て逃る
全八が扇されば。いよ〳〵怪さ。聽さ仆まて。人を呼び活るふ幸ふく魂生まり。
見く驚りて名氏を問ふ。管領家の走卒ふ。阪陀平と呼てあこ。今
雖く三勝が家へ厩の仰を傳さ立くる打しも。如此さの男淫ふ去り来て
ろが咽喉をいく〳〵締るとあ問えが。その後をろ〳〵といふこれ疑ふべ〳〵もあらぬ。全
八が不為ふめりと猜〳〵。直ふ阪陀平を招〳〵。旅館へ来る途中ふれも又
ふの曇昏ふ奈良ふ来りて二帛を失と示〳〵あり。汝ホを搦捕らん
とせ〳〵。ふ〳〵ふ同者ふ初めひ。審ふ一五一十を物さ。阪陀平を伴ひ。
通雪汝ホが往方を尋めりさ。ふ〳〵ふ至まり。ふるふ阪陀平さゆ蝶
九平が衣服袴をふ。あまさそうが物ふれとい。ひ〳〵まば阪陀平を温り
ホ八全八。蝶九平が不為ふるふ問ふ〳〵。明ふりとまふろ。とひあり

もれば。汝ホ阪陀平が衣服を剥とり〳〵弘用〳〵。管領家の迎人さと偽ふ。
三勝を欺〳〵出せ〳〵ふ疑ふべ〳〵とり〳〵ば。三條行原ふ〳〵。平三とゆ〳〵んが。
ふ〳〵ふられを阻むべを。見汝ホが相語ふ。足平脚平といふものハ隠ふれ悪掘
ふるふ。昨夜街の風ゆ〳〵ふ。二平を夫ハ。夜の中ふ吉雅丸のれ
供〳〵。奈良へ帰りふれをさめふ。汝ホを搦捕るものこ〳〵ふる母
陳ふる中。責問ば。全八ホまふ〳〵周章。恨じふ蝶九平が衣袴を入ふ。
蝶九平ハいとふ母。裳脱ふねふ秋蟬の。式鳥ふ捉ふ〳〵。見ふて全八。
蝶九平がふ。ふ〳〵ふ。吾倅のこ〳〵ふ。赤根半七。ふ〳〵ふ縛〳〵
ふ。五條の旅宿ふ引ふり。吉雅丸の然想〳〵ふ三揚を奪ひ去まう。ふ〳〵
ゆ七ハ縛らふ。ふ〳〵ふ送恨ふ。ふ〳〵ふ。咳ば曽ふ。ふ〳〵ふ冷笑ひ〳〵。人の非ふ。
が罪を脱ふ。ふ〳〵ふ探〳〵。あれ縛ふ。ふ〳〵ふ。ふ〳〵ふ。

曾左郎
俗東
布施
今市を
生拘る
今市全八郎

下部侠字加八
懐曾太郎
布施陳九郎

ぬと。驚き兵ども。敢動だにせずして。まづ塚太郎が衣服袴を剥とり。金八とくるひ
轟くと。格闘するふ二人の悪棍に拂退撥遣られ。とうのく悍まどもひとつ
をうろ。いそがうよりあり。思ひしが。遂よ迯ることを得ざる。阿容々と縛られ
ものとなる。曾我郎は。沢陀平よ衣服を返さしめ。そのよ布施今市
が奸悪憎むよ堪ずとのたまふ。管領家へ送るべし。這奴ホハそれ
ぬれ。主君頼朝の誅度とうくんぞ。ゆるすべい。賊の人の歎きと。通宵のひつるぞく。
這奴ホハ大和へ帰るべし。罪を家則よりて。其許の一命よ恙なくか。
憤を散じ。怒を偏しゆふるとて。叮嚀よ勸解しゆば。沢陀平点頭くべい。
こゝ。もれ下れ。管領家の禄を汚さるものるふ。人よ猛らるを。
衣服を剥とりとるさば。却いるる眼をうれん。二条とうあ。相撲とる
醫師もあれがどれを頼るこのふ中途ゆて。暴ど病發三郎が家まで送ゆるぞ。

醫師ほうが家よ立寄て保養しゆひの外ホ一夜明せとそうさんかれば。
こゝろ人ふも悉く。続井家の誅度ふもるじと信ずるを。密語ば。曾我郎
大よ欲ひ。こゝ。母言語を車しゆ。その日を鉤るふ沢陀平ひ。こゝ意を
金八塚太郎よ對ひ。汝ホ。これを雑ろそふ。のこの壮佼の面を視よあべい。
こゝ。ホ沢捨ても引掃ゆ。立地よ怒を雪べきよ。かゝ名ひろつゝんと罵て
さゝ。曾我郎よ目礼。猶ゝ別るよけるば。曾我郎ホ布施今市を引き
さゝ。大和を行ゆるべ。かくて沢陀平ホ。彼醫師ゆ家よゆるく縁由
を物ゆ。其所ゆ送らるゝ。管領の館よ帰り。形のごくひとらへ。
こゝ。管領の近臣ホ。その名よ及べども。沢陀平が爽を手さるる不怪
日暮ゆ。別よ三郎が家よ迎の人を遣し。則その應を待るふ。その人ひとり
立ゆ。三郎が門ホ潜ゆ。人ありとも見えざるとふ。そホ不審をるこそ

如苦く思ひなげく。明白は主君の供えなくして三彷はいさつるまゐりとて。
急ぎぞとまらしこらく。その夜をすごせーが結見沢陀平ゆゆしく後り来つ
このふ途あく猛は病起り遂は三彷が家は到をを引ざりとの近臣ぞさこ
彼舞くぶ化へめをらるも殆がしとそ。爲くび向ともるくり。こは又笠松
平三八。その夜さり三條河原ゆく。三彷が橋みうれ奈せ三ゆくを怪く。
これを遮り留く。四人の癖者と挑く駆しが又一人の武士樹蔭より跳出
矢庭は三彷を撥攫ひ。忽然と去りしるば入主八塀ゆふ赤をうち捨て。
とを追留んとーつ是ども霄闇なるふ。風雨烈しーかりけるが終は及ぞ雨
歇く後又舊の河原へ立帰るふ脚平哭平が打殺されうとく。彼此人
立集ひ市の正の下主糸らく。その屍を屢検しほとり近くを尋ね
ぬ日ぞこーふ至くー平三八因幡を見愁くーふのらくーされ一時の怒

ふ発ふく。二人の轎夫をうち殺しーられば自の罪は脱ぶ。三彷を奪ひ去
る癖者ぞはぞ推量は違ざるとぞこれを明白は所出く穴翼をぐ
自めぞてぞ余は惜ひは足くねど。三彷ぞ往方もちぞ。又は寛を雪で
ちくーふぞくー罪は當らんいと朽を。彼癖者どもは家は帰て
三彷ぞ身價せんといひる旅客は鬻はくぞ女児。何ぞどのとゆくんの
旅館はうさられーーをそれも假初は面をあらくるその人の帝黨は似ら。
うーや三彷彼木ぞ毒みは陷くるも阿客くーを保きたれ来たの
ぞぞは負くー結髪の夫の爲は弟操を守るを。学の人は彷うをうたいひ
かれくー死のやーせん。ちぞー條を脱きく。ちのびくは三彷がゆくーを索。
彼を救ひもくー後は。るもかくもあらめと深念ー家はもるくーぞ夜の中は
宇治のくは奔りく。平等院の庇をうふくく躁は浴の爲倖を

はやくに件の定平脚平ハ隠れたる悪棍なりし。死後に旧悪露顕せり。しかのみならず。彼等を殺せしものゝ往方を尋索るに等閑なく風聲をきゝ三ハこれを覚りしにや。はやくところおちかくれしが猛に洛を立退しかバ此ハの貯もなく衣をせざまず。かくやすらはじとや思ひけるが。昔もかく零落ふれしときハ奈良なる膏薬を賣るに。彼所ハ其をよくしるに便宜の地なりバ。今度も南都へ赴くべしとて。井筒宇治の旅宿を立出。直に彼地に到りしが。昔相識なる人も。おほくハ世を去りて。頼むべき蔭もなし。志ざしが衣服を賣るなどして旅籠に充られども。これも竭ていまはすべなくなりける笑を栽させけるが。柄杓をもちて観音の霊場を順礼する行者に打扮。毎日に南都の街衢を徘徊し往来の人の袖に附なるハ商人の店前に立在て乞食しつゝやうやくその日の露命を繋ぎぬ。

百度の願事

厚倉二郎太夫友春ハ。密に赤根半七と謀しあハし。彼に三勝を奪ひ去らし。相伴ひつゝ嵯峨松曽をさしてハ。親に立まいらせて忠義の壮役なれバ。これなれ婦を換さし。全八蝶九郎を搦捕て。後より来ぬと。ゆふぐれその翁ハすでに五條の旅宿より。直に祇園の旅館に来り。吉推九に。嚴君の怒甚しく。頭を告。今市布施が奸悪半七が孤忠。ともに潜かに演説し。とくに轎に乗てひて南都へ供つかまつるべしといふままに。吉推九ハ是を聞て。彼のなにをかむがへて後悔し。且又の怒を畏て。全八蝶九郎が奸佞を憎で。かるにても半七に不忠不義のねぎ衣を被せし。ずがひにも誤を綴ハ。離いそふる。只明白に勧解まゐりて。許されなば潔く自殺せんと回答し。おひ定るを色あるもの。二布の夫ハ頻に感激しつゝ。儀うちうなづく。されば続井家の郎君

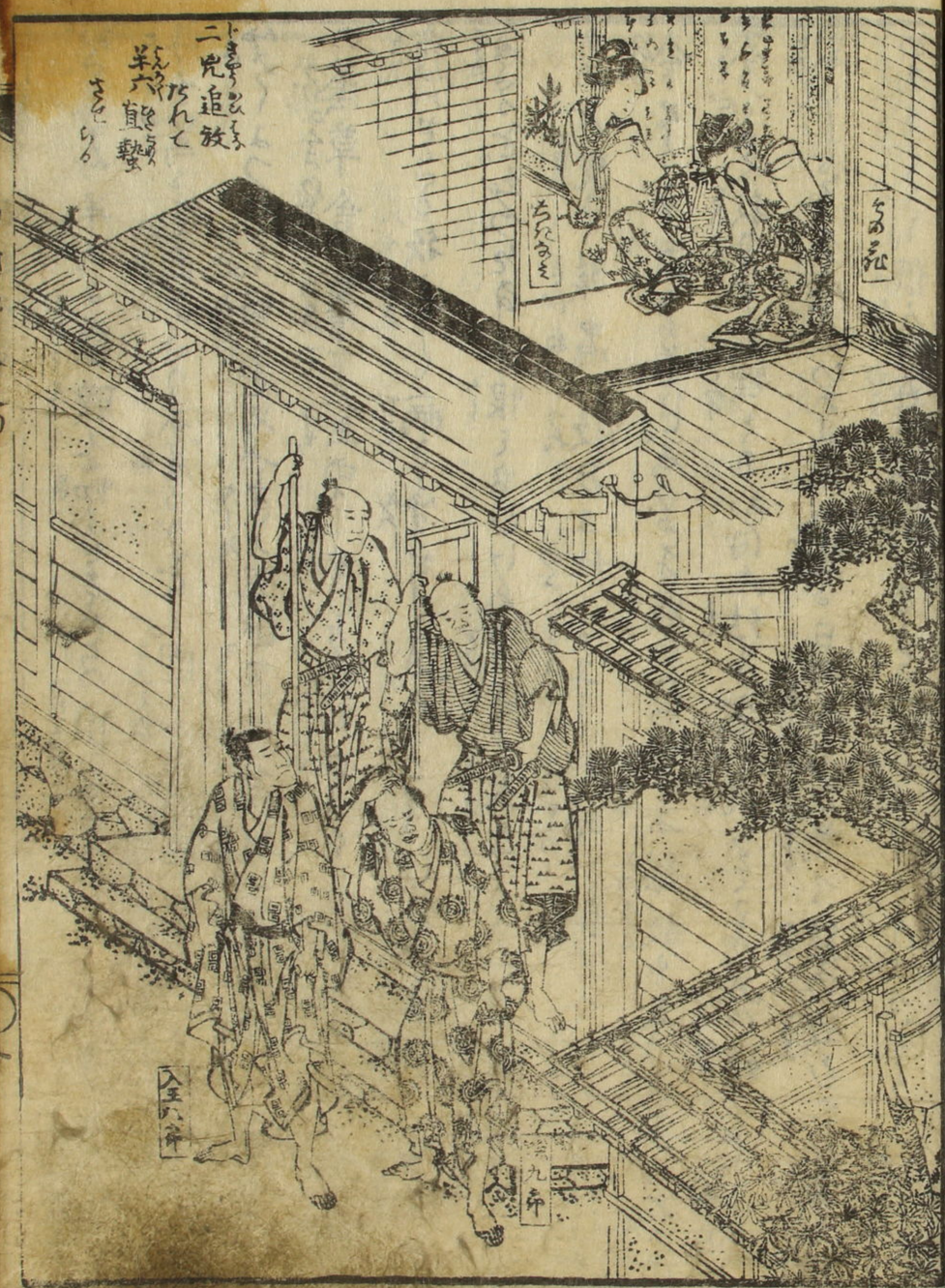
あくまでもとて。もくあるべきで。君ハ一國一城の主なれば。くゝ中ゆるおのゝ
小八郎よりつゝひゝ。身を塵芥のごとくすべきあべた。今こゝろハくやゝ。
雖ゝを奪去らるゝゝあんぞ。ん。ハ悞を明白ならしむ。彼が
忠義いくづゝあり。彼を不忠の罪人とするもふも。大厨のもん憤解く法の
ハ尺ゝのうんる。君のハうろふあり。もしなべ行るもちゞーが祝ゝ。二藤参夫
がもうとゝもゝゝ。もゝゝ帰館あるべし。理を尽くして諫ゝ。俄頃ゝ南
都ゝ殘ゝ川ゝまゝしさゝ主君順昭ゝ。僕頃日。間者をもゝく。吉雅君
のもん言ゝ近臣が出居を窺せゝ。雅君のもん悞ハ事ゝもゝ。
近臣ホがゝ。ゝ偉ゝ。その家ハ箇様ゝゝ。全八塚九郎が為体
審ゝを告ゝ。赤根半七出ゝ。吉雅九の傳をうけゝ。
ゝゝ。病ゝゝと偽ゝ。五條の旅宿ゝ引籠。舞ゝ三擣ゝ

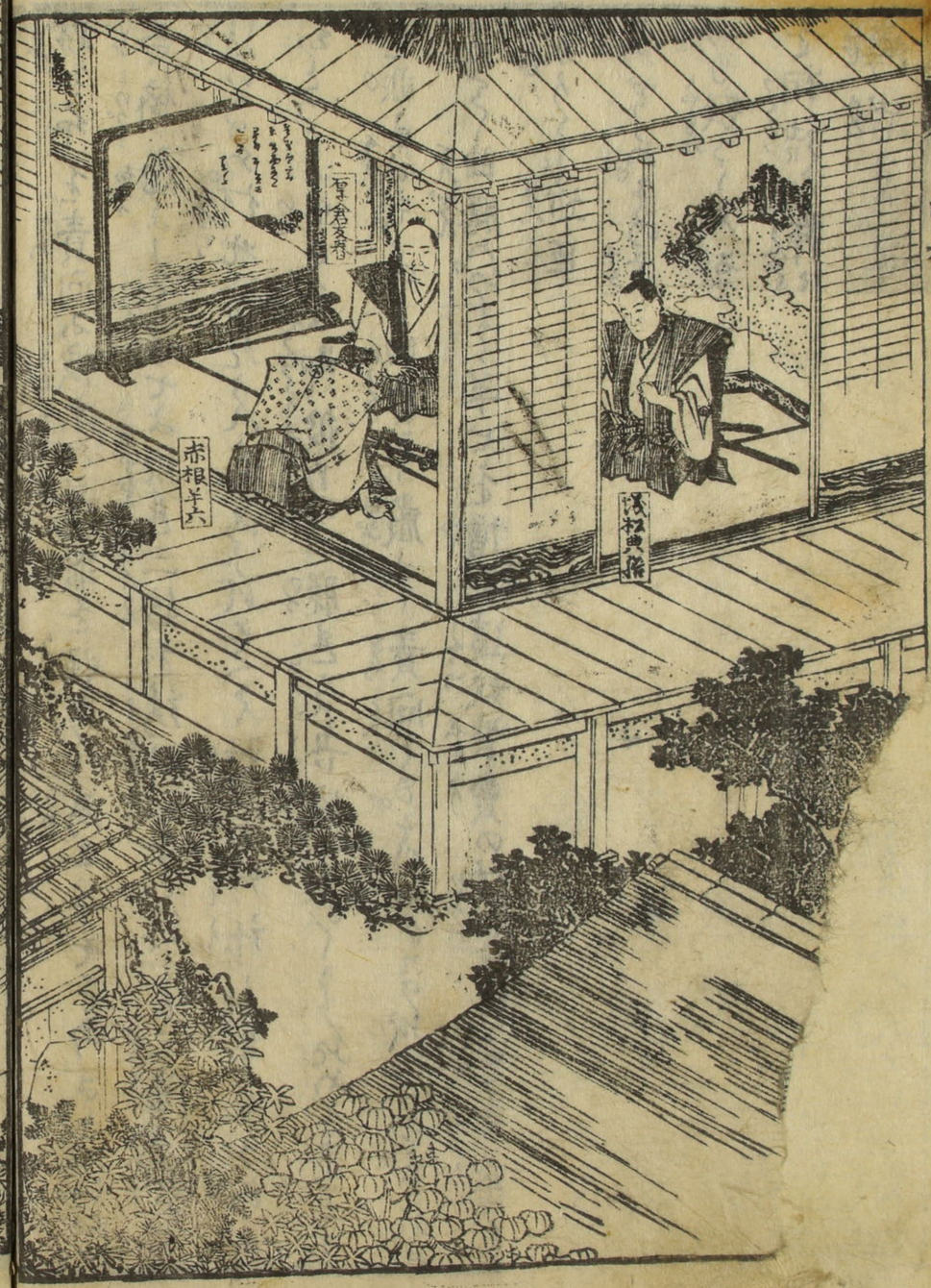
偽婦と密通ゝ。人口を憚ゝ。後難を怕ゝ。全八塚九郎を相語ゝ。彼
雖ゝを。吉雅君ゝ。ゝ進ゝ。酒宴ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
罪服ゝ。ゝゝゝ。何ゝ。ゝ。ゝ。全八塚九
郎ホハ。後ゝ服ゝ去ゝ。ゝを。蛾松曾太郎。捕ゝ引ゝ。
かくの如く。證跡分明ゝ。日来のもん憤を散ゝ。ゝ子の親頁ゝ
ゝ。雅君ハ何ゝもゝ。怒の甚ゝ。ゝ
ゝ。直ゝ俗を發駕ゝ。今朝ゝ入ハ
ゝもゝ。ゝ。ゝ。ゝ言語を喝ゝ。
順昭ゝ。ゝ。近臣ホがゝ。非法の挙止ゝ。
ゝ愛を失ゝ。ゝ。吉雅が越度ゝ。彼ハ年ゝ
備ゝ。ゝ。ゝの過ゝ免ゝ。近臣ホがゝ行ハ

その罪を宥ぐ。就中、赤根羊七は、物の用ならぬ者にひとし。老いるかぎりも立ぶらず。日ごとに重く用ひらるゝ。恩を稟ること恩ならざる白後。彼が往方へ、草を苅拂ひても、宗よ。汝典膳とのゝ。全八は九弟を鞠問すべし。羊七がゆくへも、なぐさもとさぐらんとて、小膳を敲く。松二郎夫達ぐ。それをうけたまはり。又まうを奏す。かゝるに、吉稚君は、二郎夫達ぐ。

対面すべくして、老臣ホが云ふ安ふじめのくり。とまうせば。順昭ふば、誘引ずとのたまふ。二郎夫人は、吉稚丸の子舎人のかさて。一五一十を告げ。償ふ。舊の恥ぢを雪ぐ。順昭ちゝ吉稚を待じ。此度のるふつたて近臣ホが非法の挙止は、主の悞なれども。所のまぐ弱官なれぐ。ふくも智を以後を慎へと教訓を。吉稚は始終改を低垂て退出る。さる程に蛾松典膳は、君命を稟て、二郎夫人を全八

蝶丸弟を責問ふ。彼ホは弟の罪を軽せん為に。羊七をあざむきまどはす。吾倘愚よりも。羊七を欺き三徐を誘引出すとのたまふ。後のるる。何地へゆくとも。此度の奸計を。羊七ぐるとも。出るる。都彼ものゝ脱去。吾倘のゝ。かくて死を見るの。是非に及ぶ。とゝ回答ふ。厳しく責問ども。その外のるべからざる。曲膳は。羊七を憎む。這奴柴賣の孩児なれば。陰を蒙る。近臣の上を列り。剰千ゝ宝を換ぐ。女児園花を妻あへ。その方を受ぶ。さるを彼犬自ら。近曾生ぶ。朋輩ある敬ふ。ものゝ才学を。忽地ところ驕る。君を欺き朋輩を相弾ひ。舞ふと交通ふ。これ面目を失ふる。言語同断。辯者なり。ま七ぐるへ。とう論ぐるふ。その罪は又とくぐも


二見追放
たれて
米六自殺
さそらる
ちくまつ
ちくまつ
入江八郎
九郎


赤根半六
浅松典膳

かゝ。すべ羊六は雛腹を切せぞんの情のあるうさまを。とのたまへば。彼又
子を罵ること。面あくまで木辰るゞごとし。園花は又の怒の烈さ恐るゝ
笑くゝつけゝく。好ゝと云人きはの色。只はゞ七が往方あ問へゝ。いとゞ樹
の蔭。草舎の簷下小豆あゝ。ぬひ名。衣もうきそれ秋風は又や病えの
霞はせさる秋。久ゝ病ゝ生せ。ゝも。ゝさりけるべ音耗を等閑ま
ゝるを。ゝをすゝと恨をぬひけめ。男子と生るゝひあ。婢妾もある
身の不。況ゝ旅寐の徒然は。他ー女子と假初の契りを結びめ人も。
命ゝゝを罪あ問ど。ゝるを腹のたつまゝ。縁故もゝりさまゝねゝ。その
蓼ゝゝ之報えゝ。理ゝもおぼえ侍ゝぞ。それゝてゝゞ身の妬みゝ。男を
報ゝゝゝゝゝゝゝいはゝゝは生る日の物ゝひ。死て後の迷ひゝ。物ゝも折
のあゝゝゝ。彼人の在ゝねべあゝさまはのゝいのゝゝん。さるゝゝ問も考

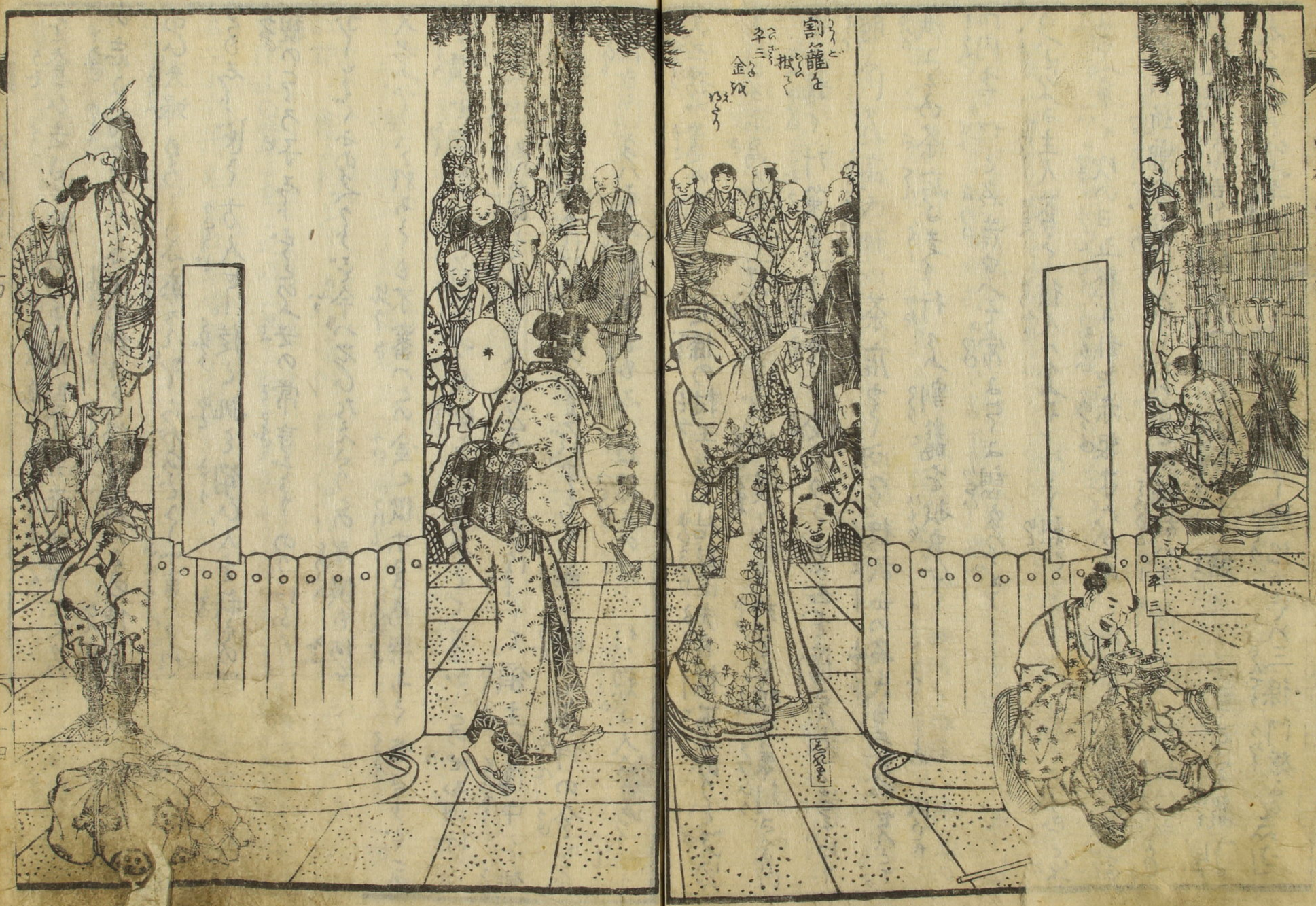
ぞ。ゝゝんゝるゝゝ云ゝゝ。ゝゞ身ゝゞ。自害ゝゝゝせ侍ゝめ。人ゝはゝね歎
ゝゝ。結ひもゝゝ夫の。ゝの底は解ゝゝる。顔ゝゝゝさゞ慰ゝゝゝゞ
もあゝんゝゝは又。ゝの森とゝゝゝ。ゝゝゝ又を
諫め。母ゝゝ。声を惜ゞ侍。ゝめば。敷浪も羊七をけゝゝは。ゝ女児
が貞操のゝつもなゝねゝ義ゝ。ゝゝゝゝゝゝ。夫を諫め寛るゝゞ。典
膳もかゝ園花は位ゝなゝゝ。勇をゝゝもゝゝゝ。終は羊六ゞ死刑を
放べゝ。彼色の罪状を定め。二郎を夫ゝゝもふ。主君は笑えゝげゝゞ全
八蝶九郎を追放は六はその子の眼はゝゝ。生仕をゝゝゝゝ。
かゝゝゝゞは六ゝゞ子の為侍ゝ。ゝゝゝ。日、鷲を見怒ゝ。ゝ漢水
を踏ゝちゝゝ。憂苦の中は日を過ゝゞ。終は生仕を止れ。直堅いさ
ゝゞゝ。典膳二郎夫ゝを傳。僅は命を繋ぐゝゝる。月俸を

なかりければ。ゆくりなく遺恨に堪ず。されば三ぞ半七が。日外博士ぶりて。
親の諫を用ひざるの禍を惹出せり。這奴憎しとおもへども。さすがに
恩愛の悲しさハ。その往方も知らまほしく。あるときハ怒り罵り又あるときハ
ひとり歎き。天日明なりといへども。わが家のうちハいと暗く。絶て訪人も
なければ。憂を慰むよすがも無し。げに栄枯得喪ハ。四時の代謝がごとく。ゆゑ
ある梢の花。後るゝも先だつも。みな散る秋にあハざるべきや。彭祖が命長
かりしも子孫に伝ず。石崇が富貴なりしも。生涯を全するに足ら
ず。徳なくして貴からんと願へば危く。富て驕れるものは亡ぶとや。禍福
吉凶は亀の卜部に問んより。尾を泥中に曳ふれたらど。半六なにがしの
らたまは。米谷の楠を伐たる事を後悔し。論篠が諫さへ思ひ出されて。
朽なましと。思ひど。今ハそのかひなかりけり。ある禮に園花ハ。ゆくりなく半七が

なき思ひ凝りて。病さへ日にそひて弥増て。悩てひたち臥しくより絶て
首を擡ず。ゑえ来想思病のなりければ。醫師も眉根をよせ速に
平愈なすべからんといふに。典膳ハ安き心もなく。数浪ハ毎日に奈良の
大仏に参詣し。百度参といふ事を怠らず。女児が病悪。頓に本復あらせ
なんと祷の外。更に他事なかりけり。其ハさてあるに。笠松平三ハ。奈良の
巷を徘徊して歌祭文を唱ゑ。乞食して日をおくりて頃しも九月の
廿五日になりぬ。けふハ高天神の會日なれバとて。彼社頭に立在ぬ
諸の老弱に袖乞をして。借ありく所に。頓て其代参とおぼしくて従者五
七人を将る武士。門前の茶店に憩ひ。馬をバ店前に繋がし。その
身ハあたりなる所に入りて。主従割籠を披くなぞ。平三これを見て
乞ふその傍らにりて。従者に對ひて。飢たる頓礼の好者になめ

ゑびといふ。其の声や偏にゆゑなん。主ありたる武士。若党を呼で。なんぢ
何かのとらひしてられば。件の若党ちかく招きて。平三を呼び入れ。
飽まで飯を食し。さていふやう。汝今飽られがたくし。翌はさぶらふもの
有なむ。これは自らが主の食残しなるあり。割籠とて日ごとにゆへき。
夕餐にせよと宣まふこと。平三は索めて真中をしつと持ぐ。是を提て
ゆけとのふに。平三は数回押戴き。割籠を引提て。又社頭に至りて残を包
み。申の下尅に及びぬ。かの塒所を往んとて。大仏堂へ赴しが。又物ほ
しくありしかば。高天神にて取出したる。割籠をひらくにおもひもうけで飯の
中に一包の金あり。三猪が身価と書つけたり。これはいかにと驚き怪しく
つくと寝思しく。縁故を推量るに。三猪を奪ひそこしたるは。かの領主なと
の。世の聞えを憚りて。あく奪ひ去しを。後にかくそうかへしたるなるべし。

又三猪が旧の養父は。五條の村主にて。結髪の夫も。彼所にありと聞けば
それらが所為か。二ッに一ッは違べからず。遮莫これも許さず。彼も兼りさざめの
を狼藉く計策なからん。今更この金をかへさんとするとも
腹立しけれ。高天神の茶店にて。向ひし彼武士の名氏も志りもやせんとて。
饑にその茶店に来り行て。割籠を投ひ。如此その殿は領主の
御内にや。何と名告りしぞ。常にここに憩ひけるぞ。志りぬらん。と志らし
おへとひけに主人答く。彼人はかくずめられ憩ひ給ひしかば名も志らざると
まだ云べくもあらで。次の日五條に赴て。赤根がもとをたづね。里人にかひ
六ヶは近曾閉籠らまつくおへさる縁故は子息もとらふ壮佼
の家供して京に赴く。三猪といふ弁て密通し逐電せる罪
まるくとらふ平三これを聞て。さすがに暁ゑさそれは三條河原の


割籠を
金子

を奪ひ去る壯佼とて結髮の夫赤根半七くれぶり人は彼の文の志を悔ぐかしふ主の供〳〵俗よあんべその便宜を窺ふ。密に名告あひ。夫婦のろくもふ奔るん。かゝらべるどく一言ハつれあも如此と笑ざる。るもろ〳〵どく方人せ。徒と挑を聞ひ。人を救るの罪を犯らう、寔よ親のとろ子ろ〳〵どとの。其の常言ぞうあり。けるり実の女兒ろり。さべ。かゝるぐふあべくるど。今ハそひなえろう。この牙價も何ほどとろ恨ろつ。又ろふゆう。さ彩ふくも不審ハとの金く彼ホる為体ふく奉ろどこの永價を贈らんやとれ。ろを故とそふゆとて。そふかゝこの地ふぼけろけ。ど。彼割籠をふる人よ。やどろあハをとくて。領主の藩中を徘徊ふとろよ。食るれば。内へ入らるべ。ちく餓ふ臨やども。件の金をべ一枝ものしるハど。元翌をもろゆね罪人の牙ろれば勲ふ人ろとる。ふを渡らんとものどる。母奈良の街衢を徘徊〳〵。そのびくふ三拐が在所を尋ひの外ふ月日をるく〳〵。四年あるろ歟経るれ。

夜半ハ月魂

さても赤根半七ハその夕三拐を追蒐三條行原ふく〳〵。全八蝶九郎等ぶ。平三と挑ミ戦ふとろふ追著。矢庭ふ螺九郎を突仆〳〵。三拐をふ脇ふ抱つ〳〵。闇ふ紛ふ〳〵去り去。行原伴ひふ北を斥〳〵。吉田の森をちるど。白河山の麓ふ至る比及ふ。雨も歇ろ更闌ろ。月ハ出ぬど。天ハる曇結陰ろ。路くふく。往ふも既ふ迹絶しぶ。ゆをふ〳〵三拐を扛ふ〳〵さ〳〵ふゆ〳〵縁由を生ぶど〳〵。理ろくもふく〳〵ふつふべ。さとそ懼〳〵もろひけゆ。そどれろさを渡り生ぜ〳〵のどもも。ぶ朋輩ふハれど。彼ホと謀〳〵ふハ〳〵。ゆ〳〵計策ろるふハふべ。彼ハ彼ゆ志ぶりく〳〵。私慾の為ゆ〳〵ふハろふ志りて去ぬ。

の為ふと。審ふひらんはうぐくしおぶとの縲縛を受えちゝとぐーいわる頃
そのゝさを祇園の旅館ふ居さしかるひとる郎君はずあいちてゞ主君あるゝ女
ちゝ死人ふ在ちゝるゝ。偖ふ立びゆゝ近臣ふ至るまで明白ふ名と
ゆゝど。偖酒ふ耽りゆゝふ。侍人どゝがさゝめふれど世ふ受えるばすべて郎君
の紙度とゝのりているゝ禍の出るうんも量ゞ図さるふゝるゝ大厨あゝ憤
ふ母ゝ速ふ居くゝゝ愛子をゆづゝ失えとゝをゆくば家隷ふ
ゆふ汗を握りゝ。周章大さゝるゝ。ちもゝされば侍人をゝ。ゝのさめのてめ
て郎君を偖酒ふ勧ひるゆふを伎倆あるゝ。そのゝ欺さて奪ちゝん
と思ゝ。ちゝとゝくゝもつゞ者ゝゝ病みるゝ。旅宿を異ゝ且生居も自在
ゝるゝさればこれを棄ゝまゝをゆざりしふ中病ゝもちてゝ果ゝんとと。彩
ちもあるとゝふ同志の忠臣偖ゆふふ孫宿ふ落ちゝ仇中の後宮を告。

そゝゝさゝ奪ちゝとゝゝ。これ地ゝ。これとそのゝさと密通しその非を掩ん為ふ郎
君ふ假托ふ贖のゆを計較その發覚ゝ奔りたゝと風声ゝば郎君の
ゝん悪名を雪べくゝ主家ふ禍ゝるべーと相語ゝ親を捨ふ妻子
を顧ゞこゝゝ不義の儒衣を被る雨夜の暗紛ゝ再旅を投る泡蟲が。
志ゝゝゝゝ。それふ遥ふ質かゝ。縁も好もるゝ人を虐ゝ忠義ふ
ものゝくゝふをゝゝも。死ゝくもゝんが。かゝゝゝゝゝゝ主家危ゝ家
隷老黨ふゝゝゝ。その妻子ふ至るゝ。悉ゝ離散ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝん。家を殺ゝゝ駅の人を。助くるゝんゝゝ締ゝ懲ゝゝゝ鬼ゝ
ふゝゝども。忠義ふ換る慈悲ふゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝも又。ゝゝゝゝゝ腹ゝを切。仇も怨もるゝ人を。殺ゝ。衆ふ贖ふゝゝ又
ゝゝの親ゝゝゝゝ。それゝゝゝゝゝ折をゝゝふ報をゝゝゝゝ。

同志の忠臣に勧えおそされバ。後の子ハ玄易かれ。縁故ハかくの如し。不便
なり盛の花を。散らして忠義の太刀風を。弥陀の利剣と観念し仏果を
ゑさとのひもあへど。肉りき引抜く刃の電。薄がくれに三猪ハ。吐嗟とぞうり
飛退を。ゆるさず半七が。又突かくれを見僧り。裳蹴かへと夜あらしみ。
山川の音凄じく。あはやくと呼ぶ声も。妻恋鹿の友音のミ應え助くる
人もなし。三猪ハ稚なかり。彝ハ手馴て身も軽く。半七ハ又そじめかうり。ころ
ゑさして殺さんと。追ふが左右かく打ぬかけど。追まくり逃迷ふ。是や叫喚大
叫喚。氷の地獄焦熱の。玉なす汗に身も冷て。脱もかさなの下にころ。三猪
今ハかうと見る。生まるべき骨に身を脱んとするもわらば。忠義の為と
寛かなる事をしたる壮士の。途とて脱しなれんや。命そふる迎とも。
ひとさしなり河の山に冬らく紅葉そへもに散果る。身の秋をしらせん。ここに前

世の悪業なりせバ。人を恨るよしなけれど。故ありて其年其生死も志らぬ
母を慕ひ。浮世の義理に絆されて。世のさまかくれもあらね。人に一言遺し。
なりしん後にその人に。語らくぞとひし声も。涙にひとぶ曇る夜の。顔ハ定かに
見えねども。忍ひなるる風情なり。半七も瞼ふさがりし。鳥の死ゐとするとき。
その鳴ことに悲しく。人の死んとするときにその言のよしといへり。我が親ハ術に
あれ世でやハ。世をかくさらばとく三猪ハ。死んとするに胸ふさがり。ほつぞし
涙を押拭ひ。恥かしるすに我ながらか又笑ましく。三八。実ハ骨肉の親なる
ぞ。過世あしくて三才のとき。乳母に生別れ又ハ又かが七才の投斧に
撃れて非命に世を去。仇ある人に恩を稟。養はれてハ根を絹よし
孝行ハ尽さずとも。不孝をせじと身を省み。いそね生居の障子あけくれし
隔てて仕し養母さへ。世を早うして後ハ。いかなる縁ありて養ふ又も疎まれ九才の

冬く人をまど。殺されんとちくりしが。かくて日〻一人の情ふく。命助りそ人を又とるのこて養育を。永丈伸てん反哺の孝ふ。辞くこんろう結ん雅ちとさふ結髪ー。夫ふ一トくび環會母の生死もこ〻ろ〻ー。耻を捨たる世渡も。朗詠催馬楽早歌ふ。人の心ハ慰ま。どこが嬬さハ慰るころも。ふ絶こく位顔をうはを楽屋の十す境。ちらね操を狩衣の裏あるうもつぶ夫ふ。ちゝせをはーとハちくども。烏帽子のかけ緒ちとこく。音軋さればその又親ふ。捨これる衣恨もる似こう。ちくば夫もいろだろう。ふくるーくちばとこん。逢ぞふあくれ死ねばとく。門翁の隠居を学ちど。夫ふ羨ハ見せーとそくーと彼ふあこうこく。遠離居る城ふハそかかー今雪見もちこぬ。人ふ忠義をさそさこて今の親ふハ孝こうとど。色情やを迷もこ。きりどろを色を人ふ漁こいろだろう悪ーこれど。才の悪業ハ歎ども

及ばど。護身嚢ハ夫の紀念内こる撥ハ母ふあ人。割符ふ甘ここて亡又の。遺ちも仕こうこう。涙の雨ハ絶ど降る。笠屋三郎が才の果を。こうこん後ふ仕こくくど。その夫の名ハ。そそこうふ。嘆こうあげつ〻掩ふ袖ふ。言の終ハ口隠ぬ。母七ハ少ち毎ふ。そひあるるタのこうれば眼上ふふりあげた。又も耳も側こく。数回嘆賞ー。舞子ふ稀ある孝ふ苦節。ふくふ羨ることあり。りこそまるの乳母をあさんとハいんざるや。と問ば三勝驚ち怪こそをいろふくこ。ちりあくる。りこその人ふとちこんども。こうこちこ。せこが眼ふ明見めく刀ふ伸断せど。又こちこ退く闇の方ふ。鳴こく渡る雁ど音も。女夫ふ交こ疑ひの天こう晴こ雲の間ふ。頭を出る月影ふく。そどめこー面を。あこーつ。こんかこ見ま。ぶ雅顔と。衣服ふ隠る大柏の。枝ハ互ふあ。ぶえあこ。とこうこぶ夫ふくふくこ。げふちこんふこうこくこりつふと。

白川越よ
三猿を
殺さん

なりとも不呆ましよもぞ理なる。そのときは七八ツ双をおさめつく。三猿を勤り
扶け。小草刈布。なりともふつゝかなく。さそひ出す。それ近曽吉雅丸乃
御供して。洛よありといへども。病気ふ苦しみ。あはれさまへ絶て一ト世すじひき
そのうちふ逢ぞ。え来主従。その名をふる遁られば。続井家の郎君なり
とんぞひうけぞやありなん。鶺にも雨夜なるあはひそひした打かれど声をを
聞つくれも又。吾妹子なりとは思ぞりき。雅きとこ不別まつりが面がゆり
いはまれども。霄闇なりたれかくまでおもあらじ。のりえおりて刺も殺しなべっ
さそふ悔しくあふんぞかし。鳴乎危なる危かりき。さるふもてもそのなかは
豊田の山本ふるく。荒熊よ御ずさされしより。絶て生死もあらましぞ。太るさ
は世よなき人と歎きそひ。さるふ今の物語ふさへせうやくふ暁知ねてるか
是までに又のふかき望みなきのうく人よしぞ失へんとは志なひかめ。さると言むすうも

恨みとなく。母ちゞ父の非をあらはさじとて家にも帰りなはざる。その孝子の貞。
感激ふ堪ざりれは却ひひがひなくも父の命惜まかくて。近曽蛾松典膳
の女児園花を娶られども。前の誓は破らじと終ふ一ト夜も彼と衾を
共ふせざ。この年来我なる父なるにそなてか死せりや世ふありや。おしまへしく
神仏ふ祈願せし験ありて今日今宵危窮ふ迫りしが。かく環會て。
これも夫婦の悪縁なりなん。さるく形なや。と世をすてるとき園花がなりもて
さしく吉雅丸病気保養の為。洛ふ住びあひしを。今市全八郎布袋蝶
九郎が奸悪厚倉が誠忠曽太郎が質朴。ともぐく京奈良の為に土
一トをも説きし。又ひふ世の又のすまあしきをうさんはいと畏くも悲しけれど。
昔丹波都どのふ誓ひあひたるも。栄利の為ふ忘却し。蛾松氏ふく
縁し結ん下らるふく。それさは失へんと志なひしるすをれさへ面目なき

それとしらずも。又やそのをさを殺さんとせしハ。兼忽の挙止に似たれども
一夜なりとも伴ハず。身を潔くなさしとおもひ定め。誠心ハ誰が為と云ひ
なかりしからバ。名告あふ事もなかりせバ。空に不思議の對面
くとも。首尾を揃へられば。三楞涙を堰かねて。答へハとられつゝ為に。絶し
妻をもべからず。色にも愛ど情にも。ひとは人の忠義におよぶべからざる
色情の為に貞女にも勝れし志を。空しくハ名なき恨を持たんされ
て後ハいひわけなしと。言の葉にあるの神ハ在ねど。栢の紋を舞の為に喚はなでに
そひらぶ君ハ在ざく。大和路にありとおもひつゝ。妹と夫の山のかひもなく隔られぬ
ふかくる報をなくさても雲のたえずとおもひ。そのをさの空のとく瞻てハ。月も日もなき為
に照らしぬハねらと。かつちかはしが。名告あふさし年来の志ハいかなりなむ。かくハ
命も惜しからず。今の養父ハ年三十と呼ばしそ。卑しき世をたのしハなけれども。なさまは

ハ立騰りて。財宝の為に惑され信義を失ふ人にあらざれバ。恩愛もゆるしがたきに。いかに
親ハ孝行もえつくさず。父母の生死も同定やぜして墓するかなりがたるかと悲しく
ハおもふど縁故もなりがたねば園花どのと母ふんに。姉きみハ罪なきはふりしれ身の
忠義にあるならバ殺しもくぞどうぞ口撥。芝生に坐ぬ只。常を命じ。白く
妙なる頂を伸一花咲る姫百合の散るを遅しとなる親に。年七つなるを
嗟嘆して。されそのそしや。殺さんと思ひ定しへ。身を潔くせんとてうちまに。
既に吾妹子ありとおもひて。これを殺さハ義に違へり。さればとしく夫婦なる
ともふ存命しても此の忠義に假托て迹も躰をもなきのあんどハまたよき親
護厚倉やしへ面ぶせとされべからそそのをさを殺して丹波都どの。誓言おひしに
母の言様もいさぐかなりそのをさハなかし存命して親種より年三になるを
あひ。孝行を尽しある義をきれバ不孝なり。只死べきハわが身ぞといひつ

刀を抜かんとせしが。三勝慌て携へ留め。浮きよの中の互ひに。忠孝に身を
殺しなば。たとへ三勝ものがれても死なんとする生残り。物思ふ情ある
言の葉に似たる情なれや。人は何とも親と親とが誓ひし許せしにも
の妻なりしが。なかなかに学を去りて影護しまゐらせしなれども是死ぬべき。
ひと埋めんと恨みつ。携へ添へる刀の鞘に落つる涙は石も鏤の玉も数まさる鮫
人の歎きもかくやと哀れなり。半七は三勝に諫められてはじめてひとへに
刀をおさめ。げにそれよと慎みて。そのうへも殺さずとも死なず。潜よりの
地を立ち退き。一旦は妻と呼び夫と呼ばれし年来の節操に報
いし。亡母の庭の訓も忠も義もなかりし袋で絆なる。今もむかしもたとへ分るる。
胸の鏡もおぼえて。楽昌公主の故事も。慢にいひ出されつ。膝を進めて
身を起せば。子が身もろともに三勝が頂より外を掛叙も。[illegible]

むすぶの神。送り代の形見さへ全聚も悪因縁。よしそれとても郎君の
ある悪名ぞふ雪なるが。夫婦が今は数ならぬ。とかくこの[illegible]罪科なれ。ん
のたまひけり。大和にありし山の様を。ふりさけ瞻れば月魄も。西に傾く木の
間漏る遠寺の鐘も音つきて。草葉に集く虫の声も。いとど哀れを
十寸穂の薄かれ行く。夫婦後なる先にたちてゆく程に白河山を
うち踰えて湖水を見ながら。腋ちかく陰もなく。夜はほのぼのと明けにけり。
かくて半七三勝は。さしたる由縁のなけれども。近江国多賀荘は佐々木の一
族在城して。洛へも遠からず。学するに便宜の地なれば。隠れ棲みけるとも
あれば。聴く彼所に赴きて。僑居を求むるに此ところ三味線といふ楽器
学び得たる。これを嗜むもの多かり。これなん三勝が又丹波都が弾初たりし
ものなれば。いとど昔を忍ばれて。三勝は洛にありける日より倣ひ得たりし

三勝
半七と
さの
吉の
住居
ろう
えんせ

なれバ彼此の女の童に。彼三味線を教へ。七ツ男の童には手迹の指南を
なしく。艱難の中に月日をおくりけり。その年の十月より三猪有名して女
子出生し。親のよろこびて守養育子ハ恩愛もいとしまさりければ夫
婦ハ只掌の中の玉と慈しミその名を阿通とよびつ。面影ハ父母に肖
まいと美麗なりける猶に光陰矢のごとく。又梭のごとく。お通ハはや五才に
なりにけるが。母三猪が毎日に彼此の女の童に教るを聞きいたりけん。いつか
ね舌に椰節唄ふも可愛しかりけれど。家ハ究て貧しければ只
乳子を養ふにハ物足ねものなれバ。夫婦ともに談合し。
この不如意をのがれん究竟の地なれど。山ふところなれバ。絶て大和の
音づれを聞ことまれなり。洛の景迹をみるにハしかじ。鎌倉ハ洛にも劣
らぬ。都會の地なり。諸國の人の集るところなれバ。外ならぬ大和なる又

のなりも又三猪が養父又平三がなりを聞くよしもあらんかしと。家
財を活却して路費とし。親子三人多賀の荘を首途して中先道を
下りけるに時ハ九月のはじめまで住つかぬ旅寝も寒しゆゑにや。水薦苅
信濃なる沓掛の驛に宿かりし夜より七つ頃に發熱して。ただち死べくもなけ
れど終に風湿となりて腰たたず。藻塩草のあつめし貯しもたる路銀も
ただに至て用ひ尽し。進退究りしに。いかにもすべきなれど三猪ハいとおしくじ
く看病しつなれど猶へ。衣服を賣て。旅籠を貰ひ。薬の價にあてれども。
りく裸になりそれも尽たり。あれどもなれぬ里に来てハ。物借べき友もあらバ。
かくハなせ今なれし。多賀にあるかりと悔れど。甲斐のなきことなれもかひ
なし。一夜ことに寒けくあれど。親子が會ハ。身は夏のままなれ。又やお通さへ
病もぞとて又母ハいとど心くるしく。お通ハ友もなれ。旅の徒然に堪ずて。

この廣き宿りも舊の狹き家が住ひ。翌八夏賀へ帰り、ものとくく注
あるべし。彼を見我をそのみかまとにいく〜肥さちびねく。輒魚の涅を吻ひ
を異にのトんされば三拐が乏ほそさんいろうるん。寒る是苦中の苦こそ秋
思こそ。ずひとりの。秋うとくひろうえ〜。

三七全傳南柯夢卷之四終

富貴花を、そ
東寅貴紀卷之三
東寅貴花春之三

醉醒子十卷目錄
醉醒子太閤記
卷之拾五